

地域におけるアートの役割についての一考察

－「ひろさき美術館～マレビトの祀り～」展の開催を通して－

塚本悦雄

本稿は、一昨年（平成28年）の夏（平成28年7月30日～8月12日）に開催された「ひろさき美術館～マレビトの祀り～」展を振り返り、この展覧会が弘前という地域に対し何ができたのか、どのような役割を果たせたのかを検証するものである。それをもとに、今後この地域におけるアートの関わり方を考えていく。

本展の開催場所である弘前は東北屈指の文化都市である。歴史的に見ても貴重な財産であるその景観は、点在する洋館などの歴史的建造物を中心に、その風情がまだまだ残っているものの、その風情は徐々に失われているのが現状である。市民の工芸的なものへの関心は高く、また、弘前は「弘前さくらまつり」や「弘前ねぶたまつり」など、イベントが多い地域でもある。現代の美術に関わるものは稀であるが、2002年に開催された展覧会「奈良美智展 弘前」の成功などの事例もある。それらのことから、弘前には文化的な企画に興味・関心を持ち盛り上げようという気質が備わっているという見方ができる。

先述した通り、歴史の風情が感じられる町並みは、弘前の‘ウリ’であり、貴重な財産でもあり、観光資源ともなっているだけではなく、市民の誇りでもある。地域住民が地元の魅力を感じていない、誇りが持てないとなると、その地域は疲弊する。そこで、新しいものを取り入れつつ、古いものを大切にするような気風をつくり上げて行くことが重要になってくる。そのことに、どうアートは関わるができるのか。その試みの一つが、本展の開催であった。

本展の内容は、弘前市の仲町伝統的建造物群保存地区に点在する4棟の公開武家住宅に弘前に関係の深い4人の作家が4棟の武家屋敷において、それぞれ個展形式で作品を展示するというものであった。「マレビトの祀り」というタイトルは、「かつての津軽の武士、そこで暮らしていた人々の魂を呼び起こし、たくさんのお客、‘マレビト’を迎えるために作品を祀る」というアイデアからつけられたものだ。展示はそれぞれ歴史的な建物と現代アートが互いの魅力を引き出し合うような見応えのあるものとなった。

会期をねぶたの時期に合わせたこと、新聞、テレビやラジオで取り上げられたことなどもあり、来場者は3,340人（うち構成員数112人）と、武家屋敷の平常運営時と比べ2倍以上であったが、増加したのは、県外などの観光客ではなく、地元の市民であった。また、会期中に、各会場で実施したアンケートでは本企画を評価するコメントが多かった。これらのことから、地元市民の文化財とアートへの関心をこれまで以上に高めるという目標は概ね達成されたのではと考える。今後も歴史都市弘前だからこそ出来ることを念頭に、現代のアートを通し、市民が地元の歴史を含めた文化への関心を高めるような質の高い企画を考えていかなければならない。また、そのようなアートに触れる機会をできるだけ多く創出していくことが、現時点では重要であろう。